

平成29年度の要請訪問を振り返って

県北教育事務所では、先生方と事務所をつなぐ架け橋として、「【**県北版**】リーフレット」を作成し、平成29年4月に先生方一人一人に配付しました。

このリーフレットの3ページに、先生方と事務所が授業実践を振り返る共通の指標として、問題解決的な学習を中軸とした授業の充実を図るための「**授業づくりの6つのポイント**」を示しました。

そこで、平成29年度の要請訪問について、共通の指標である「**授業づくりの6つのポイント**」の観点に照らして振り返り、成果と課題を以下のようにまとめました。

授業づくりのポイントごとの成果と課題を読んで、授業改善の手がかりをつかんでいただき、日々の指導に磨きをかけていただければ幸いです。

問題解決的な学習を中軸とした授業の充実

★ 問題解決的な学習を中軸とした授業の充実【授業づくりの6つのポイント】

※ 本（ ）は「【**県北版**】リーフレット」の掲載ページのため、平成29年度版との関連です。

ポイント1 単元のねらいと子どもの実態等を踏まえ、系統性を図った単元構想の工夫 p.3 p.4

- 学習指導要領を基に単元のねらいをとらえ、系統性や関連性のある単元を構想しているか。
- ねらいのねらい（単元の学習内容を定めて「ねらい・能力」をとらえ、単元時間ごとの学習内容を明確にすることにより、系統性や関連性のある単元を構想する。
- 各段の授業や各種調査から単元展開や授業に生かせる実態把握を行っているか。
- 各調査やアンケート等の分析、一人一人の学習に対する取組や学習の進捗、小学校・中学校・高等学校の系統性をとらえ、単元構成や展開に活用できる実態把握を行う。
- 目指す子どもの姿を具体的にたらしめ、次の指導に生かせる評価計画を立てているか。
- 単元や各段のねらいを明確にするなどにより、目指す子どもの姿を具体的にたらしめ、いつ・何を・どのようかに評価するのをおおむね設定する。

ポイント2 ねらいからまとめまでの整合性を図り、子どもの思考を大切にしながら、目指す子どもの姿と手立てを明確にした授業設計 p.5 p.8

- 単元の構想を踏まえ、ねらいからまとめまでの整合性を図っているか。
- 単元構想と本時の目標、本時の課題、学習活動・内容、学習評価、まとめまでのつながりにぶれがなければ、これらを行きつ戻りつしながら授業を具体的に設計する。
- 子どもが自ら解決に向けて取り組むための具体的な手立てを講じているか。
- 子どもの思考や問題解決の過程を大切にしながら、その過程のためにどのような手立てが必要なのかを明確にする。
- 子どもの思考の流れを想定した構造的な板書計画になっているか。
- 子どもの考えや問題解決の過程を予想したり、板書内容の配置や図表、図解等によって表し方を工夫したりして指導する。

ポイント3 必然性があり意欲が高まる学習課題の設定と解決への見通しをもたせる工夫 p.9 p.10

- 子どもにとって考える必然性があり、解決への意欲が高まる学習課題を設定しているか。
- 資料の調べや経験の活用等の工夫により、子どもが「問い」を提起し、「問い」を学習課題につなげる取組を工夫する。
- 子どもが自ら解決の見通しをもてるように、あえて把握させ、解決の方法や調べの視点等をもたせているか。
- 「子どもが考えること」を目的に「課題」を設定するよう、発問や指示を工夫する。
- 学習指導要領や生活指導を基に考えを予想し、解決の方法や調べをもつよう働きかけを行う。
- すべての子どもがあてを把握し、解決の見通しをもてているかを確認し、見直しを行う。

ポイント4 思考を促し、見取り、生かす教師の働きかけの充実 p.11 p.12

- 考える視点や方法、手がかりを一人一人にもたせるとともに、思考を促す取組を行っているか。
- 考えをもたせるきっかけを与え、どの子どもにも課題の「問い」や「問い」が十分に伝わるよう、
① 子どもの考えを促すために、発問や指示、板書を工夫したりする取組を促す。
② 子どもたちの活動や取組を促す。
- 適切に子どもの学習状況等を把握し、本時にあつた次の授業展開に生かしているか。
- 取組の進捗や状況を把握し、アートの記述等の様子を踏まえて学習状況を把握し、授業展開や取組を工夫して授業展開に生かす。
- 一人一人の学習状況を把握し、適切に応じた適切な手立てを講じているか。
- 子どもたちの活動や取組、アートの記述等の様子を踏まえて、一人一人の学習状況を把握し、適切な手立てを講じている。

ポイント5 思考の共有と興味を促す学び合いをコーディネートする力の向上 p.13 p.14

- 思考の共有と興味を促して、子どもが新たな考えをつくり出せるような学び合いをさせているか。
- 学び合いを通して目指す子どもの姿を具体的に想定する。
① 学び合いを促進し、活性化するために、板書やホワイトボード、付箋、思考ツール等を活用する。
② 一人一人の考えや取組を積極的に取り上げ、共有や興味を促すための手立てを具体的に講ずる。
- 学び合いの目的を踏まえたコーディネートが工夫されているか。
- 子ども間の学び合いの目的を共有し、一人一人が自分の考えをもつて取り組むよう働きかける。
① 子どもの考えをつなぎ、深め、広げる「言葉かけ」や、考えの取り上げ方を工夫する。

ポイント6 学習内容の定着を図る「振り返り活動」の充実 p.15 p.16

- 課題との整合性を図り、本時に身に付けさせたことを定着させているか。
- あてくまとまとめた文章をつなげるように意識して、子どもたちの言葉を促す取組を行う。
- 学習内容の再生の場やねらいに合った適用問題を設定して、学習内容の定着を図っているか。
- 本人の知識や経験を活用し、思いやり話し合い問題を解決するための取組を促す。
① 学習内容が子ども一人一人のものになっているかを確認する。
- 自己の学習や成長を自覚させることにより、充実感や満足感を味わわせ、次の学習への意欲を高めているか。
- 学習指導要領や学習日記を書かせる前に、自己の学習をとらえ振り返りを明確に促す。
① 自己学習や相互評価を学習過程に効果的に位置づけ、自分よさや進歩が実感されている。

＜平成29年度【**県北版**】リーフレット p 3＞

授業づくりのポイント1

単元のねらいと子どもの実態等を踏まえ、系統性を図った単元構想の工夫

小中の系統性

○ 小学校から中学校までの系統性を踏まえた授業が増えてきている。小・中学校の連携や接続を意識して授業づくりをしようとしている。

各種調査の活用

○ 全国学力・学習状況調査や福島県学力調査の結果分析を丁寧に行い、自校の課題を明確にして、単元構想に生かしている学校が増えてきている。

目指す姿の設定

● 単元を構想する際には、子どもにどのような力が身に付いているのかをとらえ、目指す姿（単元の終了時点でどのようなことができるようになっていくのか）を設定しておきたい。

授業づくりのポイント2

ねらいからまとめまでの整合性を図り、子どもの思考を大切にしながら、目指す子どもの姿と手立てを明確にした授業設計

つながりの意識化

○ ねらいからまとめまでのつながりを意識した授業案が多く見られるようになった。

構造的な板書計画

○ 板書計画の作成によって授業のポイントが明確になり、振り返りに役立つ板書が増えてきた。

具体的な手立ての明確化

● 授業の各段階で、子どもが自ら解決に向けて取り組むための具体的な手立てを明確にしておきたい。

授業づくりのポイント3

必然性があり意欲が高まる学習課題の設定と解決の見通しをもたせる工夫

学習課題の設定	○ 子どもの問いを引き出すことのできる課題や提示方法の工夫など、子どもが学ぶ必然性を感じられるような学習課題の設定を工夫した授業が多くなってきた。
解決の見通し	○ 既習事項を掲示したり、導入で振り返ったりすることで、本時の解決の見通しをもたせる工夫が多く見られた。
見取る場面の設定	● 見通しをもつ段階では、すべての子どもが見通しをもっているかについて、教師が確実に見取る場面を設定する必要がある。

授業づくりのポイント4

思考を促し、見取り、生かす教師の働きかけの充実

思考を促す発問	○ 「問い返し」や「揺さぶり」等を適切に行い、思考を促す発問を吟味・工夫して授業に臨んでいる姿が多く見られた。また、思考を促す発問について組織的に研究をしている学校もあった。
見取り、生かす	○ 座席表等を活用したり、ノートの記述や発言を参考にしたりして、子どもの考えを積極的に見取り、引き出し、生かそうとする授業が多く見られた。
全体と個別のバランス	● 次の展開に生かすための全体を見渡した意図的な机間指導と、つまづきのある子どもへの個別支援とのバランスを取りながら、学習状況を把握する必要がある。そのためにも、予想される反応は想定しておきたい。

授業づくりのポイント5

思考の共有と吟味を促す学び合いをコーディネートする力の向上

思考の可視化	○ ホワイトボードや付箋紙、思考ツール、ICT機器等を効果的に活用し思考の可視化を図ることで、ペアやグループの中で共有・吟味を促すような取組を行う授業が増えてきた。
視点の明確化	○ ペアやグループ学習を行わせる際、教師が学び合いの視点を明確に示すことで、思考の共有・吟味が効果的になされる授業が増えてきた。
状況に応じたコーディネート	● 意見の伝え合いに終始してしまう授業が見られた。教師自身が小集団活動を行わせる目的をしっかりととらえるとともに、学び合いの中で、どんな言葉や考えを実際に出させたいのかを具体的にイメージすることで、学び合いの状況に応じたコーディネートが行えるようにしたい。

授業づくりのポイント6

学習内容の定着を図る「振り返る活動」の充実

子どもの言葉を使ったまとめ	○ 子どもの言葉を使ってまとめを行っている授業が増えてきた。授業の途中で、めあてに立ち返って学習に取り組ませることで、本時の学習のねらいに合った言葉が子どもたちからスムーズに出てきていた。
振り返る視点の明確化	○ 予想とどう違ったか、何がわかったか、何ができるようになったかについて記述を求めるなど、視点を明確にした振り返りの場が設定されるようになった。
時間の管理	● 振り返る活動までいかに終了する授業が見られるので、導入から展開までの時間管理を行い、まとめや振り返りができる時間の確保をしていきたい。

「平成29年度 学校教育指導の重点全体構想」の中に示された「学習集団づくり」と「特別支援教育」のチェック項目に照らして、以下のように成果と課題をまとめました。

項目ごとの成果と課題をお読みいただき、各学校や先生方一人一人の取組の充実のために御活用ください。

学習集団づくり

学級・学習集団づくり ～安心感・存在感・向上心～

互いに認め尊重する

各教科や道徳教育、特別活動などの場面を通して、子どもが相手を認め、尊重し、相手の考えや意見を踏まえて自分の考えを発表できる力を伸ばさせようと努力している学校が多く見られた。今後、ユニバーサルデザインを意識した学級経営や学習指導を工夫することで、よりよい学習集団づくりにつなげていきたい。

リーダーの育成

各教科や特別活動などの時間において子どもに役割分担をし、その責任を果たすことを通してリーダー性を高めている授業が多く見られた。今後もこの指導を継続するとともに、さらに子ども一人一人のよさを見だし、個性を発揮、伸ばせるようにすることが大切である。

個を認める称賛

子どもの多様な考えを称賛し価値付ける場面が多く見られるようになってきた。個を生かした多様な考え・表現を尊重することを継続し、子ども一人一人が自信をもち、安心して学習に取り組める学習集団の育成に努めていくことが大切である。

小・中学校の連携

中学校区単位で学習の約束事などを共通にし、各計画・記録を引き継ぐなど、小学校から中学校へのつながり、連携を意識した取組が見られた。効率的な授業づくりのために、小学校低学年からの学習訓練や学びのルールの徹底を図っていくことが大切である。

特別支援教育

特別支援教育の充実 ～「地域で共に学び、共に生きる教育」の推進～

校（園）内支援体制の充実

管理職のリーダーシップのもと、特別支援コーディネーターを中心に、校（園）内支援体制を整備して、ケース会議を実施している学校が増えてきた。

ニーズに応じた指導の充実

「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成・活用を通して、目標に迫るための具体的な手立て、教材等が準備され、主体的に学ぶ子どもの姿を見ることができた。

教職員間の連携

支援員の配置については、特別支援コーディネーターや学級担任と「どこでどのように支援に当たるか」について検討、共通理解が図られ活動が円滑に進んでいる。交流及び共同学習においては、双方の担任間でねらいを焦点化し、効果的な実施方法を確認するとともに、支援員とも共有することが大切である。

関係機関との連携

校内ケース会議の開催や特別支援学校による相談支援を行い、子どもの行動の背景を考察しながら支援するなどし、改善に向かうケースが見られた。相談支援後、地域の相談支援事業所や医療機関等とつながるなど、地域の関係機関との連携が図られたケースもあった。